研究ノート

北九州市の金石文集成　若松区篇

中村修身

はじめに

長年に亘って集めておいた北九州市若松区内（旧遠賀郡の一部）に所在する金石文を平成二十二年に整理したものである。多くの資料で判読に悩んだが、初めて世に出る資料も少なくないので、一部を今後の歴史研究の一助となればと思い史学論叢に発表する場の提供をお願いし、ここに紹介する。

紹介に当たっては原則として明治元年以降は除外した。

資料の紹介は、銘の書かれている物件、その所在地、銘の書かれている部分そして銘の順に記し、各物件の紹介の後にそれぞれに対する雑記を加えたものもある。

貴重な御物や文化財に快く触れさせていただいた関係者の方々、別府大学文化財史学科の先生方に深く感謝の意を表したい。

銘の紹介

1 朝鮮鐘　若松区大字小竹一九九一―八　安養寺

筑前國山鹿庄散在二島内小嶽山安養寺奉懸撞鐘一口右志者爲天長地久御願圓滿殊者當山佛興隆万民快樂兼又勸進結縁諸衆現世□穩後生善處乃至治界利益平等故也

康暦貳年歳次庚申二月時正日

院主僧鎌秀敬白

雑記　朝鮮半島産の梵鐘であることから朝鮮鐘と呼ばれていた。昭和四十五年二月に盗難、以後所在不明。銘は『太宰官内志』による。『太宰官内志』は「此鐘は小竹村熊野社にあり、安養寺は社僧の寺なりしか、されども今其跡と云う物も聞えず」と記している。今は鐘楼基礎が往時を偲ばせる。

2 徳雲寺梵鐘　若松区東二島三丁目13　徳雲寺

日本國筑前州二嶋庄聯芳山總善禪寺之青石銘日
重器圓成新有奇聲洪音鳴動資群生晨告夕也説法
無情分昼夜也定睡自醒契心悟道遠近共驚祖風禪月求作證明
皆永享二年庚戌霜月日鑄之
當山住侍比丘光鑑
助縁勸化比丘祖棟
大檀那藤原朝臣家見等
大工道仙

雑記　大檀那藤原朝臣家見は麻生家見のことである。大工道仙は小倉鋳物師である。『筑前国続風土記拾遺』によると、当梵鐘は修多羅村の宗善寺の廃絶にともない、宝永二年に当社（日吉神社）に納めたと、由来が記されている。梵鐘銘からみて『筑前国続風土記拾遺』梵鐘と徳雲寺

梵鐘は同一梵鐘と判断できる。むしろ、二島庄と修多羅村の関係が気にかかったが、文安五年麻生弘家知行惣庄同浦濱所々目録写によると修多羅は二島庄内であることがわかる。日吉神社から徳雲寺への移動は神仏分離によるものと推察する。徳雲寺は平成十七年ごろから無住となっている。

3 板碑　若松区今光一丁目　観音堂

南無阿弥陀佛

□□妙比

長禄四庚辰年三月日

雑記　『筑前国続風土記』は年号のみ紹介している。

4 大庭隠岐守墓　若松区山手町　浄土宗安養寺の墓地

墓柱石の正面

慶長四年八月廿四日没

理清院殿辨譽徹秀居士

大庭隠岐守景種

台座の正面

平成四年十二月吉日　修理

施行者　上野茂子

雑記　上野茂子氏の修理は墓石の正面を研磨したことと台座を造ったことである。現墓は形式から慶長期までは遡らない。墓石を割る時に残る矢穴の大きさと形状から明治期から大正期までの間に造られたとみる。『筑前町村書上帳』に「修多羅村之内、大屋氏之百姓三十軒斗有之、其内本家と号する家、近年迄庄屋役に勤しか、近年零落しぬ、先祖大屋隠岐守墓、村ノ上南屋敷と云所に有之、石面ニ隠岐守理清院殿弁譽徹秀居士と記有之」と記している。さらに、安養寺は昭和三十七年代まで白山一丁目にあった。以上のことを踏まえると、慶長四年の墓は大屋隠岐守と書かれていたが、墓が作り直された段階で大庭隠岐守に誤記されたとの見方と、慶長四年の墓は大庭隠岐守と書かれていたのを『筑前町村書上帳』が編集段階で、大屋隠岐守と誤写したとの見方が浮上する。いずれにしても検討すべきことが多い。

5 梶原景次墓　若松区本町一丁目　吉祥禅寺の墓地

墓柱石の正面

慶長十四年

折舘　官入宗玄居士

乙酉八月三日

墓柱石の裏面

梶原官蔵景次

宗玄居士今茲文化戊辰當二

百歳昔時墓福府□人西□落

於是守周□□□没造□

雑記　梶原官蔵景次は福岡藩士である。墓の形態が慶長十四年頃でないことが気になっていたが、裏面の調査で納得。文化八年に再建されたことがわかる。

6　鷹取甚衛門墓　若松区本町一丁目　吉祥禅寺の墓地

墓柱石の正面

不渓宗可居士

墓柱石の正面

元和四戊午年

鷹取甚右ヱ門藤原

八月廿七日

雑記　福岡藩士の墓である。墓の形態は慶長元和期のものである。風化が極めて進んでおり読み難い。『筑前国続風土記拾遺』は石渓宗可居士、元和四年戊午年八月廿七日没、俗名鷹取甚右ヱ門藤原秀次と記している。

7　三宅若狭家義墓　若松区本町一丁目　浄土宗善念寺

墓柱石の右面

此地ハ舊若松村ノ北海岸ニシテ一團ノ墓地ナリシカ明治二十三年以来若松築港會社ノ埋築ニ因リ遂ニ市街ノ中央トナリシカハ大正六季市ハ此墓地ヲ廃シテ小田山ニ移シタリ然リニ此墳墓ノミハ市ノ著シキ史跡ノ一ナルヲ以テ其ママ在置スルコトトシ崩壊摩滅ニ瀕シタル墓碑ヲ再建シ其舊碑文ヲ録シテ此ヲ世ニ傳フ

大正十四年五月　若松市

墓柱石の正面

三宅若狭家義之墓

台座の正面右側

高峰院渓譽貞興居士

元和九年十月六日没

（今距三百四十年前　廿一世專譽書）

正面左側

この墓はもと若松市役所の北側の地に祭られていた　市総合体育館建設のため菩提寺である　善念寺に移したので　これを誌す

墓柱石の左面

公姓三宅諱家義播州三宅村人也歴仕如水公道卜公以積功労故賜采地三千六百石後爲若松城之留守元和九年十月六日卒于官乃葬其地今玆明和壬辰會百五十載之忌辰其苗裔孫供簿尊以奉礼建石墓傍以表誌云

雑記　若松市役所と公会堂の間に三宅若狭家義供養塔が映っている写真が若松区長室にある。若松市史第一集編纂の折にこの写真を墓としているが、若松城の留守番三宅若狭家義の供養塔である。現墓碑の正面と左面の銘は旧供養塔から写した銘である。

8　助四郎供養塔　若松区大字小竹字鬼ヶ坂　慈眼寺

石柱の正面

庄屋助四郎之事
□惣譽利現信士供養塔
寛文三年（一六六三年）十一月十四日寂
石柱の裏面
子孫　平安幸男
平成四年十一月十四日建立

9　慈眼寺鰐口　若松区大字小竹字鬼ヶ坂　慈眼寺
遠賀郡小竹村福聚山慈眼寺念譽順貞比丘
旹延寶元癸丑歳天六月十八月□日
冶工小野次郎右江衛門尉
敬白

雑記　鬼ヶ坂集落に、慈眼寺は尼さんが住んでいたとの伝承がある。

10　日吉神社鳥居　若松区浜町一丁目2　恵比寿神社境内
鳥居の右柱
神門一艘　岡懸　若松町
小石邑
正面額
日吉神社
左柱
元禄十六祀二月朔日　社司　伊高重治拜書

雑記　解体されている。

11　白山神社鳥居　若松区大字小竹　白山神社境内
鳥居の右柱
奉寄進石神門一基
神主中山相模守藤原秀宣
正面額
白山神社
鳥居の左柱
願主脇浦筑後屋九三郎
旹明和九歳次壬辰九月穀旦

雑記　宮司中山正成氏によると「古くは熊野神社と言っていたが、麻生の殿様が宇都宮（栃木県）から来られた時、白山神社とした」という。

12　灯塔（一対）　若松区大字小竹　白山神社境内
右側
天明五巳九月吉日
奉寄進
筑後屋九右衛門
左側
天明五巳九月吉日
奉寄進
筑後屋九右衛門

雑記　11白山神社鳥前に奉納された灯塔である。

13 お地蔵様　若松区本町一丁目　善念寺

台座の正面

ち

左面

享保四己亥月

裏面

施主　石井正五郎重勝

雑記　このお地蔵様は旧遠賀郡内の石造仏中最大の大きさか。享保の飢饉に関するものか。

14 虚空蔵菩薩坐像　若松区高塔山頂　河童堂

台座の右面

旹享保二丁酉年

正月十三日

正面

（銘あれども、調査できず）

正面

奉物面奇門衆中敬白

雑記　虚空蔵菩薩坐像より台座の方が左右前後ともに一〇センチメートル弱小さい。本来虚空蔵菩薩坐像と台座は別々の物で寄せ集められた可能性も視野に入れて置く必要がある。台座正面にコンクリート製供物台があり現時点では調査不可能であり、次の機会を待ちたい。河童封じの話は火野葦平氏の創作小説である。

15 真教寺半鐘　若松区蜑住　浄土真宗真教寺

古い銘

捧壽□信尼

奇先祖代々

一衆精篁提

□□□康永

寶暦十庚辰年四月

□大庭□衛門

前源四良是衆

建誉□念信士

譽□妙泰信尼

譽了円禅定門

□壽清禅定尼

新しく追加された銘

昭和二十一年

八月十六日

松尾太三

仝妻トモ

當興十三世

奇昌代

九州若松蜑住

爲先祖並戦没者

追善供養

雑記　この半鐘には新旧の二銘が刻まれている。古い銘は先に記し後にまったく別の銘が追加されている。なお、古い銘文は読み難く更なる検証を要することを付記しておく。

16 道祖神　若松区大字安屋字向

明和六年

猿田彦大神

丑八月十五日

雑記　安屋から竹並にいたる道筋、向集落内の三叉路に立っている。

17 蛭子社鳥居　若松区浜町一丁目2　恵比寿神社東口

鳥居の右柱

日本之西朝建立□石門来海蛭子之宮

若者樟舟乗波順風斯降紫陽垂福興窮

正面額

蛭子社

鳥居の左柱

安永九年歳次庚子孟冬之吉　発起　安川慶治

18 供養碑　若松区脇の浦

台座正面

無縁法界地蔵尊

右面

文政九丙戌十月吉日

左面および裏面

當浦世話人

泉屋和吉

前田屋弥助

仲屋次太良

山鹿屋弥三吉

雑記　海難者を祭っていると、伝えられている。

19 供養碑　若松区山手町　浄土宗安養寺

碑の正面

飢死

三界萬霊

横死

裏面

志麻觸中志

大庄屋

松井正五郎

石工重七

文政十三寅

仲秋十五日

二十七世勧譽

雑記　飢饉に関する慰霊碑か。二十七世勸譽は安養寺現住職の十代前の住職という。

20　蛭子社鳥居　若松区浜町一丁目2　恵比寿神社西口

鳥居の右柱

天保五甲午歳八月建之

福岡博多　相部重右衛門
寄附連名　廣瀬藤左衛門
伊藤久右衛門
真玉正兵衛
有瀬伝七
瀬戸惣右衛門
野村久左衛門
米屋市郎次
松永徳兵衛
紙屋治吉
磯貝治兵衛
丸崎屋平助
日高重右衛門
立石又六
渡辺五兵衛
八百屋次郎
扇屋藤平
角屋八平
斧屋久治
箕屋三右衛門
高瀬屋與右衛門
煙草屋治吉
釜屋伊作
紙屋治郎吉
鞍屋善兵衛
綿屋卯右衛門
米屋喜八
米屋太平
畳屋卯左衛門
熊本屋清蔵

□□□三
金升金蔵
帯屋仁平
米屋又平
油屋治平

正面額

蛭子社

鳥居の左柱

大宮司従五位下伊高丹波守藤原朝臣繁春

遠賀郡大庄屋
佐藤又三郎
松井正五郎
小林弥一郎
有吉長平
秋枝勘助

鞍手郡大庄屋
加藤太右衛門
安永弥四郎
青柳作十郎

庄野善四郎
嘉麻郡大庄屋
古川休助
有松直平
穂波郡大庄屋
矢野久右衛門
野見山彦右衛門
淵上卯平
右四郡
村々
浦々
若松村庄屋
松井一内
長州下関伊崎新地
石工　大森藤助敏明

21　宝篋印塔銘　若松区東二島三丁目13　徳雲寺境内

宝篋印塔の右面
大乗　三部妙典

正面
㊀

左面
執持名肆以称名
即談罪消滅即是
□善根□祇園禄

裏面
天保五甲午如月佛涅槃日
五穀豊饒□民快楽
三塗維菩提生極楽
當山従中興十世聴譽謹白

台座の右面
天保五甲午年佛涅槃日　補　治郎平内
寶塔建立大施主　正九郎内
才八内　立正内
東勸　太郎助内　伊蔵母
市右江門内　孫吉母
音　源之母　惣七母
政右江門母　惣七内
谷講　三郎助内　藤右江門内
善太郎母　万作内
幾右江門内
泉祥中
助　□地半三母

正面
天保七丙申年十月仏成道日
天下和順
奉納経大乗妙典日本回國供養
日月清明
塔臺追建副主　行者太郎助
□　兼　市

左面

奉納　太郎助妻

四国八十八ヶ所

西国三十三所

東国三十三所

秩父三十四ヶ所

裏面

願以此功徳

平等施一切

同發菩提心

往生安楽国

當山十世聴譽代

22 常夜燈　若松区浜町一丁目2　恵比寿神社境内

常夜燈の正面

常夜燈

海上安全　御米積廻船中

下浦屋市三

下浦屋源大

□□□□□

右面

大宮司丹波守遠春

世話人

秋月　御平船中

若松　所中

同所　船中

焚石積　蔵船中

黒埼　船中

船支配　瓜生佐四郎

伊藤□三郎

廻船方　一手中

焚石方　一手中

下浦屋理嘉

柴屋才蔵

川口屋用吉

福田屋正助

高□屋浅一

裏面

天保八年丁酉十一月

松井一内

□田邑

谷里助

谷仁右エ門

新地邑

坂田正蔵

本城邑

蛭子屋疋エ門

豊前田川郡

高瀬中

下関新地

石工大森藤助

雑記　恵比寿神社横、旧北海岸に在る。近くに風の方向を見る方位石もある。

23 清左衛門竹森公之墓　若松区小石本村墓地

墓柱石の正面

清左衛門竹森公之墓

裏面

公諱貞幸天正六年戊寅生
于播州姫路慶安二年己丑
三月十日享年七十二卒
寛政二年庚戌夏五月
八世裔孫貞恒再建

雑記　竹森清左衛門貞幸は黒田二十四騎の一人竹森石見次貞の嫡子である。彼の業績は、慶長二年長政に従って朝鮮に出陣、長政、忠之に江戸城や大阪城の普請を命じられた時に遣わされた、寛永十五年黒田忠之に従い肥州島原に出陣などがある。当墓は台座、灯塔、階段は慶安頃の様式である。墓柱とその直下の台石は後世（寛政二年五月）に再建されている。

24 高崎勝重墓　若松区小石本村　高崎家墓地

墓柱右面

五世源市
七十歳卒

正面

高崎勝重墓

左面

寛政九丁巳年
七月十二日

雑記　高崎勝重が小石村庄屋となってより、高崎家は代々庄屋役を勤めた。当墓の西約二百メートルに庄屋屋敷（高崎家）跡があり、往時のものと思われる石垣が一部残っている。当墓は庄屋の墓としては規模様式とも破格である。

25 高崎勝重墓前の灯塔（一対）　若松区小石本村　高崎家墓地

右側灯塔左面

呈

正面

庄屋中

右面

享和二壬戌年

左側灯塔右面

呈

正面

小石觸

左面

月建之日

26 灯塔（一対）若松区浜町一丁目2　恵比寿神社境内

右側灯塔

天明七丁未年十一月

奉寄進　願主

左側灯塔

天明七丁未年十一月

飯塚屋幾次

村屋太治郎

伏見屋利作

奉寄進　村野屋清作

米屋助吉

相生屋久之丞

下浦屋吉次郎

雑記　元位置から移され寄せ集められている。元々は一対である。

27 常福寺半鐘　若松区小竹　浄土宗常福寺

諸行無常是生滅法

生滅々已寂滅爲楽

品川道伯

柴田彦五良

同　大三良

同　伊平

同　才八

同　惣十

同　又次良

同　前六

同　弥三良

同　利三良

十二世

迎蓮社草譽上人傳山和尚

天保十二年辛丑歳春三月

大庭茂三良

同　儀平

同　幸エ門

同　才助

髙崎直助

柴田安次

大庭半三良

同　平吉

同　佐次良

筑前遠賀郡小竹邑常福寺

頓田区

大庭弥平

施　同　太次平

柴田弥三郎

主　同　勘四郎

同　藤市

九世心蓮社光譽上人賀了和尚

享保十二年

柴田半兵衛
再　同　勘四郎
建　大庭仁作
施　同　貞八
主　同　善八
同　伊八
同　代八
同　弥平
同　茂平
同　源大良

28 二島大明神石祠　若松区東二島二丁目16　日吉神社境内

石祠の左面

嘉永四年辛亥八月吉日　再建
藤木村石工
友澤伊平

右面

以金子弐拾二両造立
發頭主吉竹源九郎
大宮司伊高阿波守藤原朝臣繁雄

裏面

平成二十二年庚寅九月吉日
再仝建
先代継承吉竹源
若松石材㈱

雑記　石祠に関して平成七年に私が調査した書付の補足のため、平成二十二年十月一日に再調査に訪れた処、石祠がまったく新しく作り変えられ、それに右記銘が彫られていた。左面、右面の内容は平成七年調査とほぼ同じであり、裏面は造り変えにともなって追記された。なお、二嶋大明神石祠は当地から西約六〇〇メートルの洞海湾に浮かぶ二島にあったものを移設したものである。古代、中世の二島庄の名の元となった島である。

29 二島大明神鳥居　若松区東二島二丁目16　日吉神社境内

鳥居の右柱

従五位下大宮司藤原朝臣繁雄
大庭伊郎重

奉再建石門一基願主
波多野善太郎永□

正面額

両児嶌大明神

鳥居の左柱

于時嘉永四年辛亥仲秋吉日　伊高孫吉重昌
大庭宇八直幸
大庭彌七貞正
世話人大庭政右ヱ門
石工棟梁小田又平

雑記　当地から西約六〇〇メートルの洞海湾に浮かぶ二島から当地へ御神体が合祭された折に建立されたもの。

30 称名寺半鐘　若松区大字安屋二四二〇　浄土宗称名寺

設我得佛十
方衆生至心
信樂欲生我
國乃至十念
若不生者不
取正覺唯除
王道誹謗正
法　施主
岡田仲左ヱ門
江副何平
伊藤玖右ヱ門
邑岡源助
藤本股左ヱ門
江副平助
助治　長吉
春明　源作
忠助　文蔵
宇右ヱ門　助空
忠吉　祐七
貞平　利右ヱ門
庄右ヱ門　作右ヱ門
作助　伊右ヱ門
平右ヱ門　忠四良
恵七　喜九良
清四良　甚右ヱ門
清作
右列同行中
高子原小村
法敬本
安正文五戊午
極月吉日
鋳物師
八代住
上野三良右ヱ門

雑記　太平洋戦争直後に競売で当半鐘を購入したのかもしれない。

31 福生寺半鐘　若松区波打十三　浄土宗福生寺

周防国吉敷郡山口
瑞亀山
正福寺
十二世
正一受伐
安政五年戊午十二月吉日
中座助十郎
近藤太知左エ門
近藤谷五郎
鑄師
問田邑住人

田村新蔵
藤原道房
小工
泉儀助
藤原□房

雑記　太平洋戦争中、国策に基づいて寺の鐘を供出したので、戦後すぐ競売で当半鐘を購入したという。

32 元治力石　若松区浜町一丁目2　恵比寿神社境内
元治年間
力士隊中
奉納力石

雑記　秋の収穫祭の行事の一つに、力石、大俵や大臼などを使って力比べをおこなう。恵比寿神社が下関とゆかりがあることなどを考えると当力石は長州奇兵隊に属す力士隊によって寄進されたと考えられる。福岡藩に力士隊が組織されていたかのような見解はいかがなものであろうか。

33 雨乞い石　若松区老松一丁目6　昭和町公民館内
貴船神社
八龍神社　御旅所
松尾神社

雑記　江戸期に二夜三日の雨乞いを執行した御旅所の標石と云う。元来、三番川沖岩礁にあったが明治期の洞海湾拡張工事で没していた。昭和三十九年同海域の浚渫工事で運輸省工事事務所の係員これを発見し昭和町公民館内に移すと、伝えられる。

34 禅覺寺半鐘　若松区畠田二丁目　曹洞宗禅覺寺
釈迦牟尼佛
釈迦牟尼佛
〔以上鋳出以下針刻〕
筑前國遠賀郡
洞北村
禅覺寺住職
小早川卍舟代
明治三十九年十一月再鋳
施主　吉竹樂吉
仝　興平
右若松町二嶋
爲吉竹先祖代々
吹工
小倉住
釜田義三助正次
世話人
梅田養亭
大庭儀七郎
末吉喜九郎

天野梅吉
吉竹和三郎

雑記　豊前小倉鋳物師の製品である。

35 林成寺半鐘　若松区中川町四丁目30　林成寺

正藤寺

什物

明治四十三年十一月

発起婦人会

雑記　太平洋戦争中、国策に基づいて寺の鐘を供出したので、戦後すぐ競売で当半鐘を購入したという。